

『電気之友』誌にみる九州の電気事業（VI）

東定, 宣昌
九州大学経済学部

<https://doi.org/10.15017/13622>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 6, pp. 55-59, 1976-03-15. 財団法人西日本文化協会
バージョン：
権利関係：



『電気之友』誌にみる九州の電気事業 (VI)

東 定 宣 昌

明治三十四年一月二日、電友社社主加藤木重教は九州旅行に出発した。即ち「同三十四年一月九州及四国旅行、福岡電話交換局、同郵電局、博多電灯、福岡病院電気設備、故志田博士郷里佐賀の小城、長崎郵電局、同交換局、大北部電信会社（丁扶国人の経営）、立神三菱造船所、長崎電灯、三池炭礦、熊本電話、同郵電局、熊本電灯、別府温泉、豊州電気鉄道（別府大分間）、大分にて旧友依田精一氏を訪問す、伊予鉄道、松山紡績、道後温泉を訪ひ帰途呉海軍造船廠、江田島兵学校（東京芝桜川、明八義塾の教授たりし中川将行氏に面会す）、広島水力電気、岡山電灯、姫路電灯、山陽鉄道会社工場を視察し、阪神電鉄三崎省三氏に面会」（『重教八十路の歌日記』四八八―九頁）した旅行である。この旅行記が「しげのり随筆」として『電気之友』誌上に明治三十五年一月号より連載されているので、右のうち、九州地方の電気業に關連する部分を抜萃して紹介したい。但し今回は紙面の都合上「しげのり随筆」（その三）のみである。

（一）
十一日快晴 畑英三郎氏は熊本に向ひ、余は馬関の電友に帰路の再会を期して早朝門司に渡り、此日より愈々九州の見分 に取りかかり、先づ第一着として門司を本社とせる九州鉄道株式会社に到り、同社総務課長菊地武徳氏を訪ひたるも、福岡出張の爲め不在なりし故、更に設計部技師藤田経定氏を訪問す、

然るに氏も亦旧臘東京に赴きたる儘尚ほ未だ帰らずと云ふ、左らばとて次には同社電信電話主任藤井高文氏を尋ねしに、此程来公務にて若松地方出張中なりと称せらるる、斯くも打揃ふて知人の不在と聞き、余も一時殆ど失望の姿なりしが、幸にも十一時頃となるや藤井氏の帰社せるに遭ふ、夫より設計部電気掛望月正一氏吉田定次氏等の案内にて同社構内にある発電所并に電機の修理工場を見るを得たり、九州鉄道会社発電所 は構内に於ける電燈用として別に新築せしものにて木造なり、而して機械の重なるものは、

ウエスチングハウス二相式千百ボルト交流発電機 回転九百調革用 二台、一台は予備、

エキサイター百廿五「ボルト」回転二千回、汽機より直接に調革にて運転せしむ、

アイデアル、コンポウインド、コンデンシング、エンジン（五十馬力）

バブコック、ウエルコックス、ウォーター、チューブラー、ボイラ（ロンドン製）二台

配電盤 白大理石 完全なる開閉器、メートル、安全器等一式（中略）

門司市内の電燈 大坂電燈の支社として目下工事中なるに過ぎれば、同地にて風景尤も佳なりと称せらるる、速門楼を始め、九州一と称せ

らるゝ石田旅館等にも、今日尚ほ未だ憐れなる石油燈の点火され居るを見ては流石の九州石炭王と雖も決して鼻を高くかむる能力はざるなり、

小倉九鉄工場 十一日夕藤井氏の案内にて小倉工場を一覽す（門司より七哩余）、同工場長村井晦蔵氏に面会、工場一覽の承諾を得て工学士和田啓二氏の詳細なる説明を辱ふせり、

此工場は九鉄全体の作事場なれば、其規模頗ぶる大にして、鍛冶、木工、鑄物、施盤、仕上等普通の機械一として備らざるはなし、就中物体試験機（50 ton Buckton Testing Machine）の如きに至ては他の工場にも稀に見るところのものなり、余は曾て工業学校にて此種のものを見たることあり、施盤工場の如きは機械数に比すれば手狭の如く見ゆれども、天井の光りと宜しくして、総て工場内最も整頓し居れり、目下職工凡六百人にて、一割以上は病氣其他事故の爲め欠勤せるが故に、平均日々五百人位の就職なるが、他に手伝人夫凡三百人余あり、構内には汽罐室一ヶ所、汽機室二ヶ所を有す、凡七十馬力の汽機を使用し、目下ボーギー式客車三十台の製造中なりと、汽車用ボイラやエンジンを修理工事のため起重機を以て自由に上下左右するを見る時は、機械力の働きの大なるを知るに足る、構内に高さ四十尺程の貯水槽ありて、構内非常用其他各工場汽罐用等に供給す、又工場内に木工場を除くときは総て白熱燈を点す、アーク燈数個あり、ランプは皆ガードを以て保護されつつあり、和田学士の談話に依れば、鉄道営業引続き三ヶ年以上になる時は、ボイラ其他附屬品の修理は終始絶へざるものなりと云ふ、

構内用発電機室 発電機はエヂソン一号形にして（日中は蓄電池充

電に使用）ボイラとエンジンは二者一緒に取付あるものを用ふ、工場電燈係は工学校卒業生平山松太郎氏なり、

発電機室内の一室に於て汽車用蓄電池の修理中、又京都帝国大学より実修の爲め学士某來り、他の職員と共に頻りに蓄電池研究中なるよし、

（中略）

十二日晴 二三の旧知を訪問したれとも転居他行等にて一も目的を達せず、次に小倉電燈会社に諏訪方季氏を訪ふ、早朝の爲め未だ一人も在らず、依て漸く同社内の留守番に乞ひて機械室を窺ふを得たり、

小倉電燈会社 三十三年十月一日の開業にて、機械類は芝浦製作所の供給に係る、

発電機はホブキンソン形单相式千「ボルト」三十アムペア回転千二百

汽機は コンボウント 一台

汽罐及ポンプ 各二台

煉瓦造煙突 一基

千寿製紙株式会社 本社は東京にあり、小倉の工場は去る廿三年の開業にて、工場は総煉瓦造にて煉瓦の煙突高く空に聳へ頗ぶる広大の構へなり、英国人の技師を雇ひ居るよしにて、一ヶ月九十方ポンドの紙を製出すと云ふ、而して其材料は藁とポロにて、重に大坂、東京等の新聞用紙を製するよし、現今の職工凡五百五十人、工場には式百個以上の電燈を点し居れり、此処も亦早朝の爲め電燈掛は不在、且つ八幡製鉄所へ行く、汽車時間の都合もありしかば、残念ながら発電室には参らざりし、

製鉄所 小倉の次駅大蔵駅（門司より十一哩余）にて下車し、夫より人力車にて拾余町を行けば製鉄所なり、十二日午前十一時同所に着し、直ちに電気主任官工学士片山謹一郎氏を事務所を訪ひ、同所の一覽を乞ふ、同氏は快よく承諾せられ、先づ同所横文案内記巻冊を余に恵まる、

（中略）

製鉄所に来りて第一に目に付くものは動力として電力を採用せし事、凡ての機械は立派なる舶来品にして大仕掛なる事、電燈、電話を隅々迄よく利用さるる事、等なりとす、

余は先づ余等の為に尤も必要なる発電所の実況より之を紹介すべし、

製鉄所内の発電所諸機械は左の如し

一、 大発電機 式 基

インナー、ポール、直流式シーメン二百五十「ヴォルト」

三百八十「キロワット」

二、 バーチカル、コンパウンド、エンジン 式 台

高汽圧シリンドルの径六百「ミリメーター」

低汽圧シリンドルの係千二十「ミリメーター」

ストローク 六 百「ミリメーター」

実馬力（インジケータット）各三百

三、 小発電機 壹 台

インナー、ポール直流式シーメン式百五十「ヴォルト」

百六十六「キロワット」

四、 バーチカル、コンパウンド、エンジン 壹 台

高汽圧シリンドルの径 四百

低汽圧 同 六百八十

ストローク 六百

実馬力 三百

五、 蓄電池 百式拾個

一時間の蓄電容量 四百五十三「アンペア」

一時間に於ける最大の放電六百四十「アンペア」

一時間に於ける実用最大の力式百五十馬力

六、 蓄電池充電用ロータリー、トランスフォーマー 一 台

補助発電機と結合せる直流式モートル

之れに要する電流二十一「キロワット」

実用電流十六、三「キロワット」

各工場電気機械重なるもの左の如し

一、 電気捲揚機械 大小六台

二、 電気空気ポンプ 大小四台

三、 コンデンサー用電気ポンプ 三台

四、 電気扇風器 七台

五、 電気移動起重機 二十トン用三個 十トン用 四個

六、 ウェルマン(Wellman's)エレクトリック、チャージング、マシン 五十トン用壹個 五トン用 二個

七、 イン 壹個

八、 エレクトリック、コールド、ソー(Electric cold saw) 拾個

九、 電気旋盤 十五台

十、 エレクトリック、ホット、ソー(Electric hot saw) 三台

- 一、 エレクトリック、ドリルリング、マシン (Drilling) 式拾参台
- 二、 エレクトリック、ダブル、ストレートニング、マシン

(Straightening) 四台

- 一、 エレクトリック、プレート、シア (Plate shear) 参台

- 一、 電気製氷機械 式台

- 一、 エレクトリック、ロール、ミルリング、マシン 式台

- 一、 エレクトリック、プレーニング、マシン (Planing) 四台

- 一、 エレクトリック、グライデング、マシン (Grinding) 三台

- 一、 電気帯鋸 式台

- 一、 電気丸鋸 式台

- 一、 電気団扇 壹個

- 一、 エレクトリック、パンチング、マシン 壹個

- 一、 エレクトリック、ブリック、プレッス、(煉瓦製用) 壹個

- 一、 固定用電気起重機 二四トン 壹台

- 一、 転動用電気起重機 一ト半 式台

原動力は合計凡三万馬力以上にて

電気力千五百馬力、水圧力式百馬力其他は蒸気力なり、汽罐の数

凡五拾余個、汽機の数凡式拾四個、電動機の大なるは百三十馬力

より最小は「ボーリング、マシン」用及電扇用十六分の一馬力

まであり、

発電機電動機等概ね独逸シーメンハルスケ会社製なるが右は同国

より直接に購入したるものなりと、

其内製鋼工場にある五十噸の起重機一台に五個の電動機を使用す、

而して之れのみは米国モルガン工業会社製なりと云へり、

電燈 各工場内にはアーク燈を点火す、構内にも美麗なる鉄柱を建てシーメン、アークを点火す、

(中略)

若松電燈会社に主任技術者渡辺羊三郎氏を訪ふ、若松電燈株式会

社発電所には左の機械を据付

- 米国ゼネラル交流発電機 式台

- 同 アイデアアル汽機 壹台

- 和製汽罐 参台

- 鉄製煙突 壹基

同社創立の際は藤田学士の担当にて、工事上余も種々相談を受けた

ることあり、緩々開業後実験上に於ける機械の良否、並に石炭国電

燈営業上の実況を承りたく思ひたれど、此処にても亦発車時間に妨

げられ、残念ながら早々にして同社を辞し去れり、

(中略)

下山田炭坑 に来る

下山田炭坑の電力設計、工事は共に片山学士の監督にて、九鬼秀平

氏助手として之を扶け工事竣工後今尚在勤せり、

発電機はシーメン四極直流五百五十「ヴォルト」百四十「アンペヤ」

回転五百四十回の発電機 壹台

汽機 コムボウンド、コンデンシング 壹台

此電流を坑内の水汲上げポンプ用モートル式個(二十七馬力壹個、

六馬力壹個)と、坑内より石炭捲き上げ用モートル壹個(此モートル

は五百ボルト六十馬力回転六百のもの)に使用す、即ち傾斜にレ

ールヲ敷き、鋼綱にて深さ凡五十間程の坑内より四五個の箱を引上

ぐるの装置なるが、一回に五箱を連結し、凡石炭六七百斤を引き上げと云ふ、其上下の速度を程度にするは、常に唯老人のモートルメンがブレーキと調整器の把手を持ち、側にある回転計をながめながら之を加減するに過ずして誠に巧みなり、斯くして一昼夜に凡そ二百トンの石炭を引上げと云ふ、其石炭の坑外に持ち来さるるや否や、直ちにトロコにて男女の夫は二三丁の所を押し行き、棧橋より直に貨車に投げ入る、

有名なる石炭業家具嶋氏所有炭坑、毛利家所有金田炭坑、其他三井三菱、古河家所有炭坑は皆此鉄道に沿ひて、電友も亦少からず、去れど多くの電友諸君を一々訪問するには、限りある短時日のよくする所にあざれば、遺憾ながら全く目を閉ぢ、只煙突の黒煙に向て電力電燈の第一原動力たる貴き此石炭を濫用せざらんことを祈願しつつ帰路に就きたりき、

(後略)

(『電気之友』第一一六号)

明治三四年三月十五日号)

(38頁より)

松島炭鉱所在地 長崎県西彼杵郡松島村

大正三年六月八日

両県の石炭産額 福岡鉱務署管内九州山口沖繩九県下に於ける四月中の石炭産額は二、三三四、九七六、四一八斤にして前月に比し五七、二六五、〇三二斤を減せり

今佐賀長崎両県の産額は左の如し(註、計数合わず)

△佐賀県

芳谷 七二、九四七、二三二、相知 五二、六二三、五一三
 岩屋 一九、七八四、五六〇 杵島 七、八二六、四九〇
 杵島第二坑 四四、八九〇、三七〇 久原 七、九八〇、二七三
 計 一〇七、〇二一、四三八

△長崎県

高島 三二、七二一、八二九 崎戸 三三、七七九、六七六
 松島 四二、六二一、〇四六 松浦 八、〇六五、五九六
 香焼 六、九九八、九五〇 計 一〇四、一八七、〇九七
 総計 二、三三四、九七六、四一八

尚五月中に於て受理せし鉱業出願件数は試掘に於て福博一六、大分五、長崎九、熊本一六、宮崎九、鹿児島二六、山口一三、沖繩一、佐賀四、計八九にして前月に比し四を減じ、採掘は宮崎一、鹿児島一、計二にして前月と同様なるが、砂鉱の出願はなかりき。

大正三年六月九日

商業登記 一、商号 立山鉱業株式会社 ○本店小城郡北多久村

大字小侍四六九九番地 ○目的 石炭採掘及売買並ニ付帯事業

○設立の年月日 大正三年五月二十五日 ○資本の総額金二十万円、

○一株一金額五十円 ○各株に付払込ミタル株金額金五十円 ○公

告ヲ為ス方法 所轄登記所の公告スル新聞紙 ○取締役の氏名住所

小城郡北多久村大字多久原三三一番地 久良知一敏 同所同番地

久良知行敏 福岡県田川郡後藤寺町大字奈良第一七九一番地 久

良知重彦 同県京都郡豊津村大字彦徳二〇六番地 安藤重夫 小城

(86頁へ続く)